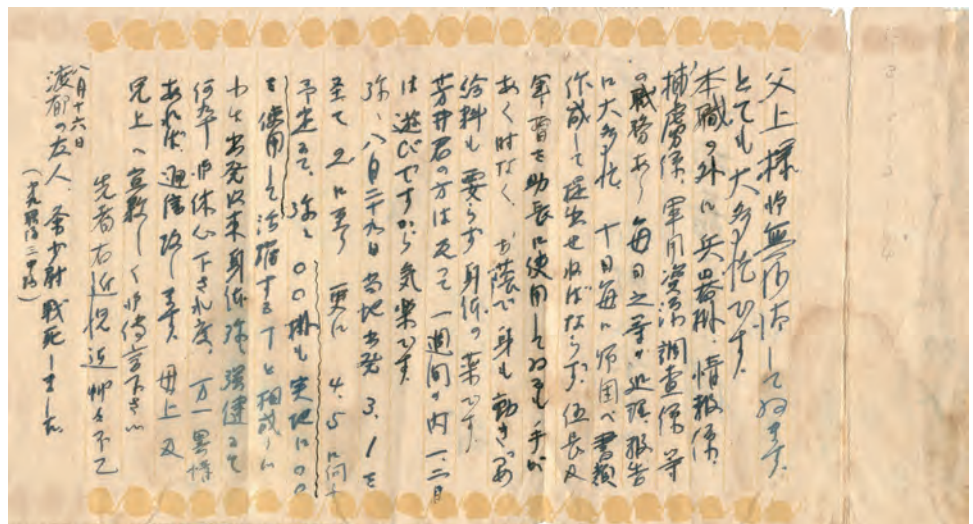




軍事郵便

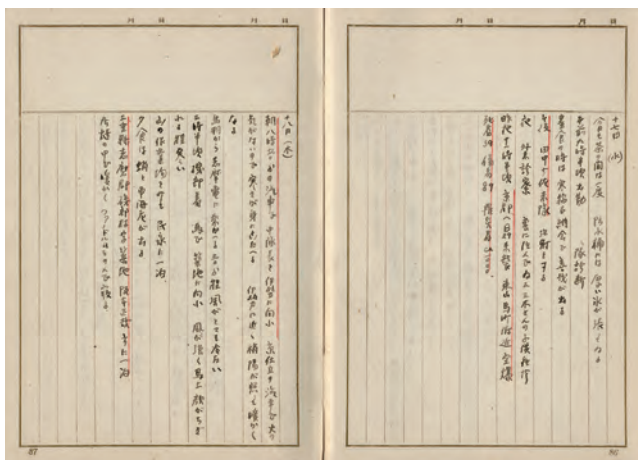


P6 2016年度メディア資料研究会に関連記事

## Contents

01	スポット ミュージアムの収蔵品 67	戦時中の日記
02	巻頭つれづれ	沖縄へのフライト中の「寄席」で考えたこと
04	平和教育・研究	平和博物館における戦争体験継承のための 展示モデル構築
06		2016年度メディア資料研究会開催報告
07	運営委員リレー連載	“平和”の教育と組織心理学
09	ここが見どころ	他者との未来に賭ける - 平和の創造のために
10	ミュージアムおすすめの一冊	『映画という《物体X》 フィルム・アーカイブの眼で見た映画』
11	事業報告	

## 戦時中の日記



1945（昭和20）年1月17日、18日の日記（赤色下線は岩田氏によるものと思われる）（18.7cmx13.7cmx1.8cm）

この資料は、伏見（第16師団）に軍医として勤務していた陸軍少尉岩田常憲氏が記した日記です。使われているのは博文館発行の「昭和十八年 重宝日記」ですが、記述の大半は、1944～45年（昭和19～20）にかけての日記です。

岩田氏は、当時40代後半、家族と京都市内の下鴨に住み、看護婦も置いて医師として開業していましたが、応召により軍医となりました。応召後の日記は1944（昭和19）年12月31日から始まります。この時期すでに空襲もありましたが、この日は、京都の街でのんびりと自由な大晦日を過ごしました。

「隊では廿九日餅揚で廿日は午前清掃午後書類検査と内務検査で今年の行事は終了。部隊長病氣引籠で何となくのんびりして歳晩を送る。大晦日は副官が気を利かして、家庭整理日と云ふ名目で休んでも良いらしいと云ふのでゆっくり朝寝する。・・・午後から英彬を連れて街へ出る。空襲が何時来るか判らないので軍服で出る。・・・今年は戦時下で戦前のような歳暮風景は全くないがそれでも相当人出がある。京楼で玩具、人形、絵本、三条の三角堂で帯止、首飾など五十円程買い物をする。東宝で前進座の菊池寛原作の「宮本武蔵」を見る。さすが暮で女の客は寡ない久振で銀幕の気分にあてた。映画をでて寺町通りを途中川原町丸太町から今出川まで市電に乗っただけで歩いて日没頃帰宅」

その日の行動の記録が中心のこの日記には、戦意高揚の表現もなく、時々、「寒い」などのぼやきが登場しますが、とても冷静に事態をみつめています。岩田氏の当時の生活は、朝、京阪電車で伏見の隊に出勤、診察や入院手続き、兵の検査などをこなし、暇な時は主計と話し込み、4時頃に隊を出て京阪の急行で帰り、開業先で患者の診察や往診をこなし、就寝後も求められれば往診に出るといったものです。何事もなければ夜は炬燵で餅やスルメを食べながら、また床の中での読書を楽しみにしていたようで、『密偵の告白』『宮本武蔵』『正伝国定忠次』『珍

らしい犯罪の物語』『グリーン・マダー・ケース』『五重塔』など読んだ書名も記しています。家族の発熱、往診先の様子、看護婦の給料の問題、空襲に備えた子供の疎開についても記しています。

度重なる空襲警報や編隊の目撃、被災地の視察など空襲に関すること、また、「沖縄最後攻撃」（6月25日）や「広島と宇品で敵機新型爆弾（原子爆弾）を使用」（8月8日）などの記述もあり、ラジオや隊で聞いた戦局に関わる情報も手短かに記しています。

1月14日（日）

「第二日曜で隊を休み午前十一時頃まで寝ている。遅い朝兼昼の食事をとって炬燵の上で二、三日溜まった日記をつける。午後二階室内床にはいつ先日借りて来たエドガア・ワレスの「黄水仙事件」を読み出したが眠くなって午睡しているとサイレンの音で目がさめる。ラチオが敵機数編隊来襲と吐鳴っているのでせつかくの休養日を起きて隊へ向かふ。三条で京阪に乗る頃、7条の橋の上あたりを高度一万尺程度で敵機の北に向かふ白い飛行機雲をみる。」

17日（水）

「昨夜十一時半頃京都へB29来襲東山馬町付近空爆 死者39 傷者89 罹災者1000」

26日（金）

「午後空は埃でいっぱいなので小島伍長と東山爆撃の跡を視察する。西大谷の被害を受けた寺では庫裡まではいって見せて貰ふ。」

3月13日（火）

「床に入って昨日古書屋で借りて来た「金色の鬼」と云ふ大衆本をよみ電灯を消すと敵機大編隊にて阪神来襲のラチオあり。まもなく空襲警報音サイレンが鳴って軍服をつけ起きていたが敵機は大阪を攻撃、京都には来そうでないので解除のサイレンを待たずに二時過ぎ服を脱いで寝てしまふ。雨の音」

3月14日（水）

「午後四時頃帰る。途中京阪電車の中で今朝の大阪空襲で焼け出された人々と乗り合す。煙ですすけた汚い疲れた顔、泥と雨で汚れた汚い服装、戦争を身近かに沁々と感じる。早く帰ったので雨中傘をさして朝日会館（映画）を見に行く。久しぶりで独り映画をみる」

淡々と出来事が綴られる規則性の中に、空襲警報が頻繁であった当時の京都、被災者を目にして戦争を身近に感じた衝撃、しかし、その後に映画をみる喜びが記されるなど、日々を生きていた人物の姿が浮かび上がります。

（学芸員 兼清順子）

\*この資料は、第106回ミニ企画展示「京都と空襲」（2017年2月4日～3月26日）に出品されました。

# 巻頭 つれづれ

## 沖縄へのフライト中の 「寄席」で考えたこと

安斎育郎

(立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長)

### 沖縄への旅と機上寄席

2016年12月20日～22日、執筆中の若者向け「沖縄本」の資料収集も兼ねて、伊丹から那覇に飛びました。今回の訪問先は、対馬丸記念館、ひめゆり平和祈念資料館、沖縄県平和祈念資料館、ひめゆり同窓会記念碑、道の駅かでな学習展示室、沖縄愛楽園交流会館、南風原文化センター、沖縄国際大学米軍ヘリ墜落現場、佐喜真美術館。あらためて、沖縄の過去・現在について学ぶ機会となりました。ツアーには、ひめゆり平和祈念資料館理事の普天間朝佳さんが終始付き添って下さり、大変お世話になりました。

私の飛行機旅には、実は、もう一つの楽しみがあります。根っから落語好きの私は、機内にオーディオ・サービスがあ



2015年にオープンした「沖縄愛楽園交流会館」は、ハンセン病者の戦前・戦中・戦後の体験を展示する優れた展示資料館です。学芸員の辻央さんが解説してくれました。

れば、必ず「寄席」のチャンネルを楽しみます。今回は桂南光さんの『抜け雀』がメインでしたが、南光さんの前に登場した漫才の宮田陽・昇さんコンビの話に考えさせられました。

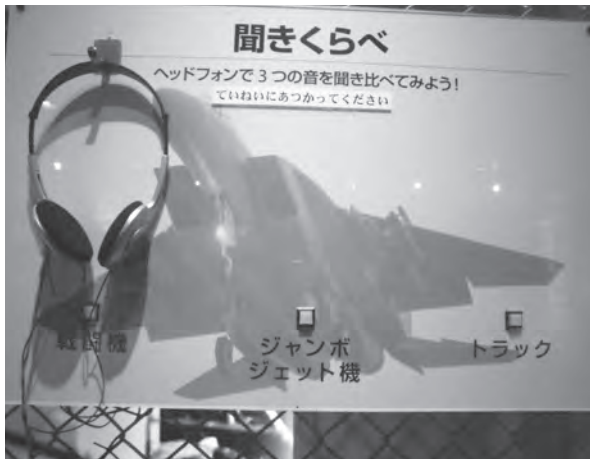
宮田陽さんは秋田出身で、大学は立命館大学法学部。ボケ役です。一方、ツッコミ役の宮田昇さんは広島出身。5年前には文化庁芸術祭新人賞受賞の実績をもつ人気コンビで、陽さんが47都道府県やアメリカ50州などを暗唱して記憶力の良さをひけらかし、昇さんにいろいろ質問する形で話が展開されます。一連のやり取りのあと、昇さんが陽さんに「で、答えは？」と聞くと、陽さんが「わかんねんだよ」と返すボケがよく使われるパターンです。

この日のネタの一つは「円周率」。陽さんが「僕ね450ケタ以上言えるんですよ」と言うと昇さんに「ウソですよこれ」と突っ込まれて、やがて言ってみせたのが「3.2419...」。「いきなり違うじゃねえか！あれ14だろ」と突っ込まれると、「秋田じゃ24だったんですけど」「ウソつけ！あんなもん世界中一緒だ」「東京は03かなんか...」「電話番号ですね」と続きます。「所変われば品変わる」ということわざがありますが、円周率は「所変われど品変わらず」。つまり、「個別性」と「普遍性」というのがこの漫才のテーマでしょう。

当日の陽・昇コンビの漫才には、もう一つのネタが仕込まれていました。

立命館大学法学部出身の陽さんが、国際司法上の問題について昇さんに質問します。「成人年齢が18歳の国の19歳の青年が日本に旅行に来て犯罪を犯した場合、未成年として処罰されるのか、成人として処罰されるのか」という問題です。さんざん議論した挙句、昇さんに「結局どっちで裁くんだよ」と突っ込まれた陽さんが、「わかんねえんだよ」と答えるという次第です。

このネタのテーマも、「人が人を裁く」という「普遍性」のある問題でさえ、現実には国境という「個別性」を越えない事情があるという問題意識が根底にあるのでしょう。



「道の駅かでな」の学習展示室にあるトラック、ジャンボジェット、戦闘機の爆音を聞き比べるヘッドホンはすごい迫力でした。「五官に訴える方法」は説得的です。

## 個別性と普遍性

京都出身の劇作家・山崎正和さんは『太平記』や『徒然草』の現代語訳に取り組んだかと思うと、『劇的な日本人』で近代日本文明論を展開し、政治家やマスメディアのポピュリズムに厳しい批判を加えるといった変幻自在の多面的な人です。著書『装飾とデザイン』（2015年）の中で、人間は「普遍への志向」と「個別への固執」という対極的な意志をもって、それこそが人類の文明史を特徴づけていると言っています。確かに私自身も、「私だけの個別的なるもの」への飽くなき執着心を持ちながら、しかしその一方では、個性性をこえて他者とも共有できる「普遍的なるもの」もそれなりに熱心に追い求めています。どっちが良くて、どっちがダメということではなくて、問題の性格によって考え方を切り分けるべきだということなのでしょうが、確かに「円周率」に秋田県の事情は持ち出せないし、個別の国の人間を裁くのに未成熟の国際ルールとやらで「普遍性」を振りかざして有無を言わず一刀両断という訳にもいかないでしょう。

藤子不二雄さんの漫画に『ミノタウロスの皿』（1969年）という作品があります。ある時、主人公が乗った宇宙船が地球によく似た惑星に不時着しました。主人公はその惑星のミノアという美しい女性に助けられ、恋心を抱きましたが、実はこの惑星は「牛」にそっくりの生物が支配し、「人間」にそっくりの生物が家畜として飼われている世界でした。つまり、主人公が恋をしたのは「家畜」だったのです。しかし、その惑星ではミノアは食料に過ぎず、「ミノタウロスの皿」という最高級の食材に選ばれて祭典で食べられる運命になっていました。この物語は、形態上の共通性は本質的な普遍性とは別問題だということとを教えています。

似たような話は江戸落語の『一眼国』にもあります。

身体的な特徴を見世物にするというテーマなので、現代の人権観からすればちょっと差別的に映りますが、見世物小屋があった江戸時代にはあまり違和感なく受け容れられていたでしょう。落語にもそういう噺が少なからずあります。

ある巡礼僧が、恩義を受けた香具師（やし。露店で芸を見せる商売人）に義理立てして、見世物にする珍しい人間を見つけ出そうとしていたところ、目が一つの子どもに遭遇しました。この話を聞いた香具師が探しに出かけ、ついに子どもを発見して連れ去ろうとしましたが、鋤や鍬を振りかざした沢山の農民に追いかけられ、ついには捕えられて奉行所の裁きかけられます。見ると、なんと奉行も役人もみんな一つ目。一眼国だったのです。落ちは、奉行が「やや、こやつ目が二つある。調べは後回しじゃ。見世物に出せ」というものですが、今では紹介するのも憚られる演目ながら、桂三木助、林家正蔵（後の彦六）、柳家小さんなど、名落語家と言われた多くの噺家が演じてきました。「科学と合理主義で固められた今日では考えられない新奇の眼と好奇心で、江戸の住人衆は接したことだろう」と評する向きもありますが、明らかに今日の人権意識とは違いがあった時代の落語です。この話に対する評価は、私が愛読している漫画『寄席芸人伝』（古谷三敏ファミリー企画）第31話『動乱幸助』の中に、「世の中の価値なんてものはあやふやだ。何が是で何が非なのか、そんなことを考えさせるような…」という表現で出てきます。

## 憲法施行から70年目の年に

沖縄への旅路で聞いた宮田陽・昇コンビの漫才は、憲法問題も取り上げました。陽さんが大学法学部の出身だということで、昇さんが「じゃあ、憲法なんか知ってるか？」と問えば、「もちろん、憲法は全部覚えた」と陽さん。間髪を入れず、「じゃあ憲法28条言ってみて？」と突っ込まれた陽さんが、「僕が勉強した時は憲法は17条までしかなかった」という次第。一気に聖徳太子の時代まで引き戻して、話はジ・エンドとなります。

今年は日本国憲法施行70周年ですが、一方的に憲法的価値観を押し付けるのではなく、制定過程の歴史的事実関係をもしっかりと踏まえながらその本質を参観者に考えて貰えるような、そんな展示企画や講演会やワークショップを魅力的に組み立てられたらなあ一機上寄席を聞きながらそんなことを考えた沖縄の旅でした。

## 平和博物館における戦争体験継承のための展示モデル構築

### 1. 平和博物館が直面する課題

戦争を知らない世代が大半となって以降、戦争体験の継承は緊急の課題とされてきました。しかし、現在では、「戦争を知らない世代」から「戦争体験者を知らない世代」への移行が始まっています。戦争は悲惨であり、二度と繰り返してはならないという思いは、戦後の日本社会に広く共有されてきました。そして戦争体験の継承は平和な社会を築く上で重要な要素とされ、平和博物館はそれを担う場の一つとして、展示や教育プログラムなどを通してその役割を果たしてきました。立命館大学国際平和ミュージアムも、戦争の歴史の中の被害と加害の両面に向き合い、平和のためにできることについて考え、行動をすることが大切であるとの認識のもとに一五年戦争に関する資料の収集や展示を館の重要な活動の一つとしてきました。

しかし、これまでの来館者が家族や知人、地域や学校など、戦争体験者や彼らと親しかった人々と接する中で直接的、間接的に得ていた知識や理解、それによって自らの人生の中に培っていたものは非常に大きなものでした。それは、平和博物館で体験者の証言を聞き、資料を見て平和について考えるためにも大きなものでした。しかし、今後はこれまでと同様のものを来館者に求めることは難しくなります。現在、体験者の証言を映像で残し、それを館内で公開する取り組みや、体験者の証言を体験のない世代が語る取り組みなどが様々な館で行われています。これらは非常に重要ですが、そうしたものが活かされるためには、展示のあり方もまた、再検討を求められるのではないのでしょうか。

### 2. 「平和博物館における戦争体験継承のための展示モデル構築」プロジェクト

このプロジェクトは、こうした状況をふまえて平和博物館において展示に対する新しいアプローチをする理論及び実践に関する調査研究を行い、それをもとに新たな展示プログラムを開発し、来館者調査などの検証研究を行って平和博物館の新しい展示モデルを開発するものです。2016年度より、挑戦的萌芽研究(科研)として採択され、国際平和ミュージアムにおいて3年計画のプロジェクトとして立ち上げられました(メンバー:小川さやか(先端総合学術研究科准教授)、加國尚志

(文学部教授)、兼清順子(国際平和ミュージアム学芸員/研究代表)、川村健一郎(映像学部教授)、高誠晩(衣笠研究機構専門研究員)、田中聡(文学部教授))。メンバーは3年間をかけて、平和博物館を次世代における記憶の継承の場として役立てるため、以下の3点の研究と実践を行います。

- ①これまでに国内外の平和博物館で行われてきた継承の取り組みを学際的に再検討(先行展示の検討)する。
- ②その先行展示の検討に基づいて、戦争体験者不在のなかで戦争体験を継承するための理論的枠組みを提示(展示モデルの構築)する。
- ③その方法に基づいた展示を国際平和ミュージアムの特別展として実施して、この展示モデルの有効性を検証(展示モデルの実施と検証)する。

具体的には、先行展示の検討として、国内外のこれまでの展示の方法について調査を行い、歴史学、文化人類学、博物館学、哲学、映像学、芸術学などの分野から学際的な視点で再検討して、これまでの戦争体験の継承を目指した展示の成果と問題点を明らかにして新しい展示方法の理論的基盤を作る研究会と、それを基にした具体的な展示制作のための調査と展示計画策定を行う二つの取り組みから成るものです。そして、これを立命館大学国際平和ミュージアムの展示として実施し、最後に、来館者調査を行って、モデルとしての実証と検証をします。プロジェクトの初年である2016年度は、新しい展示方法の理論的基盤を作るための研究会が開催されました。

### 3. 2016年度プロジェクト概要報告

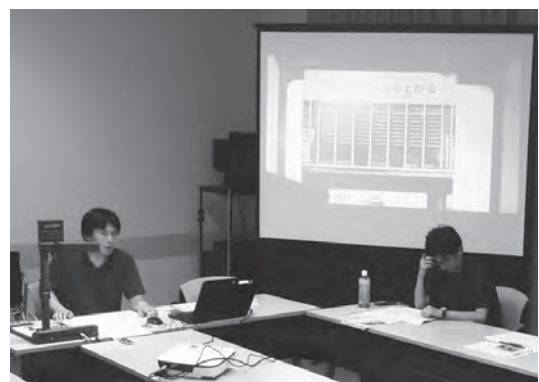
#### 第1回ワークショップ

日時:2016年7月8日(金)

報告:「平和博物館をめぐる社会意識を振り返る～課題の再検討・再設定のために～」

福島在行(広島平和記念資料館学芸員)

コメント:田中聡(立命館大学文学部教授)



福島在行氏

体系的な平和博物館研究者であり広島平和記念資料館での実践に携わる福島氏より、初回にあたり、平和博物館を戦争体験継承の場とする上で必要な検討課題について歴史的経緯と共に論じていただきました。

現在では、戦争体験継承は平和博物館の役割とされていますが、このような認識は1950年代に広島と長崎に最初の平和博物館（の前身）が誕生したときから備わっていた役割ではなく、諸実践の産物によるものです。そのため、この2館の存在や当時の原爆の凶巡回運動や総合原爆展の展示がその後の館に与えた影響、文学や社会運動など、教育以外にも様々な分野で行われてきた継承の実践、歴史博物館の中で培われてきた戦争展示、歴史教材としてのモノの扱いなどを再検討が求められます。また、広島平和記念資料館の略史を検討する中でも、展示の中での戦争体験継承の課題が浮かび上がります。

そして、日本の平和博物館に期待される役割として、①追悼や鎮魂、知識の場としての役割（教育施設として）、アーカイブス（特に語られなかったものの掘り起こしによる事後的な市民的抵抗）、②1990年代以降の平和学の視点による平和展示の模索、③来館者が求める平和博物館像（来館者が求めるリアリティの感覚：モノの真正性と物語の真正性、追体験の可能性と限界、記憶の場として果たすべき役割）、④「戦争体験継承」の場であることへの期待、⑤証言の場であることへの期待と課題、特に語り手と聞き手の相互行為の空間になれるかが挙げられました。また、近年の動向としてコミュニケーションを重視した展示の増加、記憶論やアートに依拠した展示手法への傾斜、災害などの展示への関心の高まりから「負の遺産」としてひとくくりにされる一面、ダークツーリズムによる観光化、戦後70年を迎えてとにかく残そうとする危機感、非体験世代中心の活動の活発化が挙げられました。最後に、継承をめぐる課題の背景には、特に証言を語る／聞く場は相互行為によって成立するものであり、双方に内的な衝動が必要であるが、それが聞き手の側にもあることが問われているとの指摘がなされました。

## 第2回ワークショップ

日時：2017年1月13日（金）

報告：高誠晩（立命館大学衣笠研究機構専門研究員）

「戦争遺跡とミュージアムをめぐる歴史認識問題  
ーグアム・サイパンー沖繩ー濟州の比較試論」

コメント：兼清順子（立命館大学国際平和ミュージアム学芸員）



高誠晩氏

太平洋戦争末期、日本の絶対国防圏のマージナルな島嶼地域であった沖縄（日本）と済州（韓国）における戦争遺跡と戦争体験の比較研究を進めてこられた高氏は、本年度現地調査として、グアムとサイパンを訪れ、これら地域の慰霊碑や戦争遺跡、アメリカが設立したグアムのT. Stell Newman Visitor CenterとサイパンのAmerican Memorial Parkを訪れ、とサイパンにおける戦争遺跡とそこにあるミュージアムで表象される戦争の記憶に関する比較と考察を交えながら論じていただきました。

これら地域は太平洋戦争末期の記憶の場ですが、冷戦体制下で体験記述は翻弄され、資料館や博物館と追悼記念施設とでは展示内容や記憶にズレが生じている様子が具体的な展示状況を踏まえて紹介されました。本報告は平和博物館における今後の戦争体験継承に対して大変示唆的な内容であり、その後の討議では、博物館における展示は媒介された体験の再構築であることを踏まえて体験継承を検討することの必要性、空間的な拮抗の中で戦争体験を論じることで加害や被害を含めた多様な論理を浮かび上げる可能性などについて議論されました。

\*「平和博物館における戦争体験継承のための展示モデル構築」は、科研費（挑戦的萌芽研究）によるプロジェクトです。

## 2016年度メディア資料研究会 開催報告

本年度より始まったこの研究会は、国際平和ミュージアムと国際平和メディア資料室が収蔵する資料の研究資料としての価値を再確認し、さらなる研究活動の活性化を目的として開催するものです。毎回専門家を招待し、実物資料を前に報告いただきました。2016年度は以下の4回の研究会を開催しました。

### 第1回

日時：2016年5月20日（金）17：00～19：00

参加者：15名

報告者：丸山彩（立命館大学文学部非常勤講師）、織田康孝（立命館大学大学院文学研究科博士後期課程・日本学術振興会特別研究員）

報告題目：アジア・太平洋戦争期のジャワにおける歌曲懸賞－《八重汐》の成立に着目して－

（第1回の詳しい内容については『立命館大学国際平和ミュージアムだより』Vol.24-1をご覧ください）

### 第2回

日時：2016年7月30日（土）17：00～19：00

参加者：15名

報告者：白木正俊（京都大学大学院文学研究科博士後期課程）

報告題目：『大槻隆資料』について

第2回は「大槻隆資料」について、寄贈前の調査に携わった報告者から、本資料群の特長について大槻隆氏の生涯を交えた報告がされました。

大槻氏は、立命館大学在学中に学徒出陣で入営し、上官命令でアメリカ兵捕虜の処刑に関わったことにより（油山事件）、戦後、BC級戦犯として巣鴨プリズンに服役しました。本資料には、極東軍事裁判に関わるメモや裁判資料、プリズン内の様子、文化活動の実態を伝える巣鴨新聞や写真、釈放後にかつての服役者と交わされた書簡、BC級戦犯の手記やそれをもとにした映画台本などが含まれており、各資料の注目すべき点などが報告されました。



白木正俊氏

### 第3回

日時：2016年12月9日（金）17：00～19：00

参加者：14名

報告者：貴志俊彦（京都大学地域研究統合情報センター・教授）

報告題目：鹿地亘氏関係文書からみる日中戦争の終焉

第3回は「鹿地亘資料（瀬口允子氏寄託資料）」を用いた報告でした。本資料は、日中戦争期に鹿地亘が中国で日本軍捕虜を組織して設立した、日本人民反戦同盟に関わる資料群です。

報告では、反戦同盟の活動を相対化することで見えてくるものについて言及され、反戦同盟以外の中国で反戦活動を行っていた集団の存在や捕虜の多くが反戦活動を拒んでいたこと、反戦同盟等を巡って国民党やアメリカの思惑が影響していたことが指摘されました。当時の捕虜全体の問題を考えると共に、日中戦争の終焉の状況を明らかにする可能性が示されました。



貴志俊彦教授

### 第4回

日時：2017年1月26日（木）17：30～19：30

参加者：12名

報告者：篠田裕介（立命館大学国際平和ミュージアム学芸員）

報告題目：国際平和ミュージアム収蔵資料に見る軍事郵便研究

軍事郵便は戦地と内地で交わされた書簡で、戦時中は膨大な量が行き交い、多くは兵士や民衆によって書かれていました。この軍事郵便について、検閲の問題や内地発戦地宛の書簡の残存数が少ないこと等の研究上の問題点について触れ、それらが実際の書簡にどのように表れていたか紹介がされました。また兵士達が書き残した文面にどのようなことが書かれていたか、ミュージアム収蔵資料の画像を踏まえて紹介し、従軍地や階級、出身によって異なる様々な戦争体験について触れました。



篠田裕介学芸員

#### 〈表紙写真について〉

軍事郵便（館蔵）

表紙の写真は日中戦争に従軍したある二人の兵士が戦地から送った軍事郵便です。左側は1940年に船井源一郎氏が送った「憲兵検閲済」の印の押された一般的な軍事郵便、右側は1938年に池垣勇次郎氏が送った書簡で、軍事機密であった行軍経路を検閲に見付からないように暗号（文面の中に現れる数字）を用いて伝えた珍しい軍事郵便です。

# “平和”の教育と組織心理学

山浦一保

(立命館大学国際平和ミュージアム運営委員  
/ スポーツ健康科学部教授)

私は、九州・福岡で生まれ育ちました。明るく、開放的な風土をもつマチです。この地も戦争を経験し、そして私が通った小学校では、平和教育が熱心に行われていました。それが、私という人間の土台であり、心理学に関連した仕事・研究のテーマにつながっています。

きっと、皆さん自身も、それぞれの土地・風土とともに創り上げられてきた部分や経験があるのではないのでしょうか。今回、平和あるいは戦争ということを中心に、私が出会った心理学（組織心理学、社会心理学）という分野のことや今思うことを、この紙面上で皆さんとご一緒できれば幸いです。

## 子ども時代に受けた平和教育の記憶と人間理解

小学校時代、田んぼが広がり、野山がまだまだ多く残ったところで育ちました。学校が終われば友だちと遊び、地域のチームでソフトボールをした後は、家族のもとに戻って食事を取り、翌朝また眠い目をこすりながら登校する…そんな毎日でした。これが、私の子ども時代の“平和”でした。

原爆投下の日が来ると、毎年、夏休み中ではありましたが学校で平和教育を受けていました。戦争や原爆投下の事実が、写真や映像、体験者の方々のお話しとともに綴られていきました。一人の人生が、本人の力だけではなく大きく変えられてしまうことがある、しかも何があっても生きゆく人と死にゆく人とが分かれたのか…、その“見えない力”に底知れぬ恐ろしさを覚えた記憶があります。

一方で、私の祖父は、当時の体験を語ろうとしない人でした。子ども心に、祖父という人を知りたくもありましたが、なんだかそこは触れてはいけない領域のようにも思われ、結局、私から口にすることはありませんでした。“見えない力”に影響され、一人の人生が創り上げられていくこと、人間の心が複雑に動くことに興味をもった最初だったと、今になって振り返るとそう思います。

## 大学で心理学と出会って

幼いころから小学校の先生になりたい！という夢を持っていましたので、大学は教育学部を選びました。一般教養の英語の夏休み課題は“夜と霧（ヴィクトール・E・フランクル）”を読み、英語での感想文を、感想画付きで書くというものでした。課題を出されたとき、“あ、また戦争、平和のことだ…”と、途切れることなく“平和”を考える機会が与えられてきたことは、当時の私にとっては不思議なことでもありました。でも、この機会が、今の仕事に繋がったのは確かなことです。この感想文に何を書いたかはすっかり忘れてしまいましたが、この課題がきっかけで、リーダーがどうして大勢の国民を動かすことができるのか知りたくなったのでした。それは、効果的な方法が分かれば、学級運営もうまくできるとの期待もあってのことです。

大学2年の後期、はじめて心理学というものを知り、恩師となる先生（社会心理学）と出会いました。人の行動(Behavior)は、本人の個人特性・性格(Person / Personality)とその人を取り巻く環境(Environment)によって決まる( $B = f(P \cdot E)$ )という方程式が板書されました。一人の人間が、時代や環境に左右されながら生きている。知ってしまうは当たり前のことですが、見えないはずの心や社会・組織の動きを表現しようとする心理学はすごい！と感動したのを覚えています。

恩師は戦争体験者でしたので、その経験をもとに、“目の前で泣いている子どもがいたときに、救ってあげられないようでは心理学ではない”ということ、そしてその子どもたちと時代の流れをつくるのは「教育」だと、何度も何度も話をされました。教育が未来を創る。ただし、それは良く悪くも…と。

その頃に知り、人間の怖さを見せつけられた思いをしたのが、S. ミルグラムによって行われた権力者への服従に関する実験でした。これは、アイヒマン実験とも呼ばれています。人間のダークサイドが数値でみせられたときというのは、だれもが善人の面と悪人の面を合わせ持っていること、権力の前に抵抗できなくなる部分があるのだということを、私が認識せざるをえなくなった瞬間でした。リーダーという存在が、強力な“見えない力”の源泉で、子どもたちに恐れられる存在になるのかと思うとショックでした。それは、リーダーの指示というだけで、周囲を盲目に従わせる、押し付けることになりかねないということだからです。しかも、そうして自分の思ったことを口にできなくなれば、また様々な形で大きな犠牲を払う歴史を繰



り返しかねないからです。

心理学に出会って、自分のもやもや感が整理されたかと思うと、再び“人間って…!?”と思う、その繰り返しが始まったのです。

## よりよいリーダーと“平和”

研究・教育の環境を頂いてから、学校現場だけでなく、企業やスポーツチームのリーダーのリーダーシップ、あるいはリーダーと他の成員との信頼関係構築のあり方に関心が広がっています。このようなテーマも、心理学の領域（組織心理学）で扱います。

組織心理学は、“社会や組織がより豊かになるように、信頼し協力し合う関係性の中で、個人が能力を発揮し、幸せを感じることができる環境を創る”ことを目指している分野です。多くの人がこのことを願い、意識している間は、“平和”に向かっ

ていけると私は信じています。

このことを実現するときに、大きな力を持ち意思決定するのは組織のリーダーです。そして、リーダーのもとで一人一人の成員の活動が充実することが最善なのですが、残念なことに、そのリーダーとの間で、成員たちは多くの葛藤を経験すると言われています。例えば、自分の意見や想いがリーダーにうまく伝わらなかったり、活かされなかったりすることはしばしば経験することかもしれません。

ここでの問題の一つは、そのときに生じた苛立ちや蓄積した不満感、あるいは信頼関係が崩れたとき、諍い・紛争が起こったとき、私たちはどうすればよいのでしょうか。葛藤・紛争に発展したとき、そこにある当事者（たち）の歴史・文脈、感情とどう向き合えばよいのでしょうか。その難しさは、戦後70年を超えた今でもみることができます。私の研究室では、葛藤解決、信頼回復・和解の方法、そこでのリーダーの対応のあり方を見つけようとしているところです。

## 身近な“平和”と広がりある“平和”と

国家や社会、組織の中で、一人一人の心がどのように動くかによって、成長や“平和”の具合は異なってくるでしょう。このことは、個人も組織も気づかぬうちに望んでいない方向に変化していく危険性もまた、常に潜んでいるということでもあります。みんな善かれと思って生きようとしているはずなのですが、醜く、どうしようもない部分が自分自身、そして組織にはもっと複雑な形で存在します。そのことを十分に認識してお

くことは、お互いが謙虚に生き合う上で重要なことだと、最近よく思います。

その意味で、学生たちには心理学に（も）興味をもってもらいたいと願っています。人間の心のおもしろさや奥深さ、ダークサイドも含めて。そして、（産業）組織心理学は、二つの大戦を通して発達した歴史を持ちますから、授業などを通して、大きな犠牲と当時の人々も願った“平和”を学生たちと共有し、その実現のあり方を考えたいと思っています。他者にやさしく、心理的に豊かな自分になれること、安心して暮らしていけそうだと思う日常的な“平和”の実現に、組織心理学の分野でできることを模索しているところです。

そのような模索を続けている私にとっては、立命館に着任した1年目から毎年、1回生の学生たちと国際平和ミュージアムに出かけていることも大切な時間です。オリンピックを目指して頑張っているアスリートの卵たちにも、本学のミュージアムでスポーツの意味や“平和”との関わりを感じ、考えてもらう企画を提案・実施しました。“平和”は、教育の基軸として継がれていくべきもので、そこから人間の理解、世界の動向や歴史の理解へと広げていく機会を、できるだけ早いうちから継続的に持ってもらいたいと思っているからです。

幸いなことに、世代も性格も異なる個人どうしですが、“平和”が心に訴えてくるものは同じであると確信しています。その基軸や感覚を互いに確かめ合い、より豊かに育つことを願っています。そして、それを支えるような組織心理学の教育や研究を、いろいろな方との関わりの中で今後も進めていきたいと思っています。



アスリートの卵たちにも、本学のミュージアムでスポーツの意味や“平和”との関わりを感じ、考えてもらう企画を提案・実施しました。

# 他者との未来に賭ける —平和の創造のために

小川さやか

(立命館大学国際平和ミュージアム運営委員  
/ 先端総合学術研究科准教授)

平和を創造するとは、どのような営みでしょうか。このように学生たちに問いかけると、紛争や戦争への国際的な介入や、平和教育といった意見が返ってきます。しかし、平和創造とはより多様な実践をふくみます。やや迂遠な話になりますが、ここでは平和創造の礎として、「他者の未来に賭けること」の重要性について考えてみたいと思います。

フランスの文化人類学者マルク・アンスパックは、『好循環と悪循環』（新評社 2012年）という著書で、私たちの社会を動かす「循環」について説明しています。相互扶助は、「いま彼／彼女を助けたら、私が困ったときには同じように助けてくれるだろう」という期待にもとづいて互いに支援を応酬しあうことです。このように「相手も同じことをする」という条件でやり取りが続くことを互酬性（ごしゅうせい）と呼びます。贈り物や親切を与えられた者が、与えてくれた者に恩や借りを返し、かつての恩や借りを返してもらった者がそれに感謝してふたたび与える。このような好循環の互酬性がつづくことは、友人や恋人、夫婦や親子から国家間の関係に至るまで、暖かな関係を築く上でたいへん重要なことです。ところが、互酬性には「やられたことをやりかえす」という復讐に代表される悪循環もあります。戦争やテロリズムの継続は、悪循環の互酬性がつづいている状態としてみることもできます。ひとたび復讐が始まると、その循環を断ち切ることは大変な困難です。

アンスパックは、悪循環の互酬性に陥らないためには、あるいは悪循環から抜け出すためには、相手との未来の関係を信じて自発的に与えるという賭けをして、好循環の互酬性に飛び込む必要があるといいます。ところが、私たちの社会では、将来への不安が高まり、安心・安全が叫ばれるようになるにつれ、好循環の互酬性をはじめたり、維持することがより困難になっているように思われます。

未来を確実に設計したいという欲求は、「見返りの確約がないと与えることができない」という態度、貸し借りを即時的に清算したいという態度を強化します。メールも親切もすぐに返さないと不安だ。どうなるかわからない将来に借りを残してお

くのは心配だ。そうした関係では、私を与えたものと相手がかかれたものが等価であるかどうか、その場その場で貸し借りの帳尻があっているかが常に気になるようになります。そこで、どちらかが「損している」と感じると、好循環の相互性はやすやすと復讐に代表される悪循環の相互性へと転化します。「あんなに親切にしたのに冷たくされた」「私だけが頑張っている」「私のほうが損をしている」という不満・憎悪は、現代において、友人や夫婦間の仲たがいがから、ヘイトスピーチ、移民の排斥、戦争に至るまで多様な問題を引き起こしています。

私たちが平和で豊かな社会を創造するためには、特定の人々との互酬的な関係に過度に依存しなくてもよい世界、「私が助けた相手は、私が困ったときに助けてくれないかもしれない。でも誰かはきっと助けてくれる」と信じられる世界、すなわち、より開かれた関係のなかで好循環の互酬性をうみだしていく必要があります。

立命館大学国際平和ミュージアムの2階は、平和創造に関する展示となっています。「暴力と平和を考える」「平和をつくる市民の力」「平和をはぐくむ京の人びと」をテーマにした3つの展示室があります。いっけんすると、平和の創造とは関係のないようにみえる展示もあります。たとえば、バナナのフェアトレードの展示があります（写真）。フェアトレードとは、発展途上国の生産物や製品を公正な価格で継続的に購入することで、立場の弱い生産者や労働者の生活の改善と自立を目指した、オルタナティブな貿易のありかたです。公正な取引を通じて人びとをエンパワメントすることは現行の経済的な暴力を是正するだけでなく、発展途上国の生産者と先進諸国の消費者とのあいだで、より開かれた形の好循環の互酬性を生みだすことにもなります。ほかにも私たち市民の一人ひとりが、平和創造の担い手となりうることを示す例として市民活動に関する多様な展示があります。これらの市民活動の出発点は、何よりもまず他者との未来の関係を信じて賭けることにあります。

誰の未来も不確かです。そのため誰の未来も賭けるに値します。私は平和創造の第一歩は、他者との不確実な未来に賭けるというリスクを一人ひとりが引き受け、どんなに小さく些細なことでもよいから、自発的に他者に与えることにあると思います。



フェアトレードの展示

## 『映画という《物体 X》 フィルム・アーカイブの眼で見た映画』

岡田秀則著

立東舎

2016年9月



収蔵フィルム7万本を超える東京国立近代美術館フィルムセンターで、フィルムと映画関連資料（ポスター、スチール、チラシ、機材など）の保存・公開に従事されている研究員岡田秀則さんのエッセイ集です。日々膨大な映画資料に向き合う岡田さんの経験に裏打ちされた言葉には啓発されることばかりですが、その理由はおそらく本書が“モノ”から見た「映画」を対象にしているからだだと思います。そこでは一切が平等。名作と呼ばれる作品も、そこからこぼれ落ちた駄作も、高度経済成長期のPR映画のように映画館で上映されなかった作品も、アマチュアの8mmフィルム愛好者が自らの家族の成長を記録したホームムービーも、すべてフィルムという“モノ”である以上同じ価値をもつ、それが本書の土台にあるテーゼです。そこから浮かび上がってくるのは、映画史的価値づけの外で、大衆（つまり、私たち）がその時々映画をどのように受容してきたかという、多様な映画体験に向けられた視線なのだと思います。

今から20年ほど前、岡田さんは沖縄の興行会社租映の倉庫に残された古いフィルムの調査に出向きます。その多くは、沖縄がアメリカの統治下にあった戦後間もない頃に、台湾から密貿易によって渡ってきたフィルムだったそうです。劣化が激しかったため、救い出すことができたのは結果的に一部でしたが、沖縄で50年もの長い時間を生きたフィルムを眼前にして、岡田さんは密貿易の場であった「深夜の東シナ海」に思いを馳せます。アメリカの軍艦に見つからないよう、互いの表情も確認し合えない暗がりの中で、米軍から払い下げられた物資と、戦前に台湾で上映されていた日本映画のフィルムを交換する海の男たち。今に残されたフィルムは、危険を冒してでも手に入れたい必需品に映画が含まれていたことを伝え、かつての沖縄の人々がどれだけ映画を求めていたかを想像させてくれるのです。

あるいは、1970年代以降に日本で独自の発達を遂げた映画チラシの存在。岡田さんが今でも映画チラシを集めてしまうのは「もし網羅的に公開映画のチラシを眺めることができるならば、この瞬間の、この都市における「映画状況の全体像」を見た気になれるから」。それはたとえ「幻想」であっても、こうして集積されたチラシ一枚一枚のデザインと情報が「観客の映画史の豊かな相貌を開示してくれるはず」と岡田さんは述べています。その相貌は、それぞれの地域と時代の映画体験のカタチそのものです。

岡田さんがフランスに映画関連資料の保存に関わる研修に行かれた際の「日記」に、たまたまスイスの映画監督アラン・タネールの特集がシネマテーク・フランセーズで開催されており、研修の合間を縫ってその上映に足を運ぶ様子が描かれています。そこには「タネールほど、今の二ホンの40代の映画好きにこよなく愛され、それなのに20代にはまるで無名の監督もいないかも知れない」という記述があります。私事にわたって恐縮ですが、私と岡田さんはほぼ同世代。この文章は80年代後半に巡回開催されたアラン・タネール映画祭や、タネールやダニエル・シュミットなどの撮影監督を務めたレナート・ベルタの特集上映のことが念頭に置かれているに違いありません。そのとき高校生や大学生だった人たちがこそ今40代。20代に無名なのはその後タネール作品がほとんどまとまった形で上映されなくなってしまったからです。この記述に出会った瞬間、私の心は30年前の京都に飛びました。当時はまだ映画上映を行っていたイタリア文化会館の講堂、筆記用具が置けるサイドテーブルつきの椅子、そしてスライド字幕による上映…。今では想像がつかないかもしれませんが、本国に返却しなければならぬフィルムには、日本語字幕を直接印字することができませんでした。その字幕を膨大な数の写真スライドにして、スライド映写機に装填し、これをオペレーターが手動で操作することによって、字幕がスクリーンに投影されていたのです。それは「映画」の記憶というよりも、映画を体験した「場」の記憶です。

30年前には東京と京都にいて、まったく接点のなかった私と岡田さんが同時代的な映画体験の記憶を共有できること。この「共有」という通路をくぐって、読者に自身の映画体験を思い起こさせることもまた本書の魅力だと思います。

川村健一郎

(立命館大学国際平和ミュージアム運営委員 / 映像学部教授)

## 第 63 回不戦のつどい「わだつみ像」前集会—平和のたすきを繋ぐ—

第 63 回不戦のつどい像前集会（主催：不戦のつどい実行委員会）が、2016 年 12 月 2 日国際平和ミュージアムロビー（衣笠）にて、5 日はびわこ・くさつキャンパス（BKC）、8 日は大阪いばらきキャンパス（OIC）にて開催されました。衣笠キャンパスの「わだつみ像」前集会には、学生、教職員、関係者、市民ら約 130 名が集まり、黙祷とご挨拶、そして院生協議会連合、教職員組合、生活協同組合に続き、国際平和ミュージアムの安齋育郎名誉館長が献花し、不戦と平和への誓いを新たにしました。

実行委員会の八木敦志委員長（学友会中央常任委員長）からは、「1954 年にわだつみ像前にて第 1 回の不戦のつどいが開催されて以来、一度は像が破壊されその後再建されるなど、様々な困難を経て今日に至っており、多くの方々の御尽力によって本学の教学理念である平和と民主主義が守られてきた。立命館人の使命として平和を守り育て、平和のたすきを繋いでいきたい。」との決意が表明されました。

学園を代表して吉田美喜夫総長より、「1943 年学徒出陣によって約 3,000 名の本学学生が戦地に赴き約 1,000 名が戦死、学徒動員にも約 3,000 名が参加し 7 名が亡くなっていることを忘れてはならない。戦争がなければ本当に平和なのか、そうで

ない世界の状況を見据える必要があり、主権者である学生・生徒を育てることは教育機関の責務であり、それを自覚した取り組みが必要である。」と訴えました。最後に、佐藤敬二教職員組合執行委員長より、「1947 年に憲法が施行されて以来憲法 9 条をめぐる歴史的変遷を経て、今日では集団的自衛権によって海外でのかけつけ警護が可能となっており、そういう状況であるからこそ平和を進める努力が重要である。」とのご挨拶をもって、閉会となりました。



ご挨拶される吉田美喜夫総長

## ミニ企画展示

### 第 104 回

#### 第 10 回立命館附属校平和教育実践展示

会期：2016 年 10 月 9 日（日）～12 月 16 日（金）

主催：立命館中学校・高等学校、立命館宇治中学校・高等学校、立命館慶祥中学校・高等学校、立命館小学校、立命館守山中学校・高等学校

共催：立命館大学国際平和ミュージアム

立命館附属校平和教育実践展示は、2007 年度の第 1 回開催から今回で 10 回目の実施となりました。この企画は、展示物を通じて、初等・中等教育での平和教育、人権教育の実践内容を紹介し、今日の児童・生徒が持つ平和や人権などの課題に対する意識を広く知ってもらおうと開催しています。各校の展示の詳細は、12 ページをご覧ください。

### 第 105 回

#### ミュージアム・この 1 てん「たいてきせんてんしゅち対敵宣伝須知」

会期：2017 年 1 月 12 日（木）～1 月 31 日（火）

主催：立命館大学国際平和ミュージアム

『対敵宣伝須知』は、中国国民政府の軍事委員会政治部が対日宣伝工作の手引書として作成したパンフレットです。

日中戦争（1937～1945）では、両国ともに心理戦を展開しました。軍事委員会政治部は日本兵の心情を理解するため、日本軍兵士や捕虜の日記・手記などから積極的に情報収集を行っ

ていました。本書の内容から、当時の中国はこの戦争が日本の軍部や政府、財閥の利権追求のために行われているものと捉えており、兵士や国民はその犠牲者であると認識していたことがわかります。それは、兵士が口に出来ない軍部や政府に対する要求を代弁する宣伝手法を用いたり、誇張や虚偽を排して具体的な名称や数字を挙げた文言を使うなど、敵愾心（てきがいしん）を煽らないよう努める方針を取った点に良く示されています。

また、本書から読み取れる宣伝工作の要点や宣伝文句を作成する際の注意事項などとともに、それらが実際の伝単（敵国の兵士の投降や兵士・民衆の戦意喪失を狙ったチラシ）に活かされた事例も紹介しました。

展示を通して、当時の中国が日本との戦争や日本軍をどのように捉えていたのかを知ると同時に、戦地での日本軍兵士のおかれた心理状況などを窺うことができる内容となりました。



# 現代版「平和教育」へ挑戦する立命館附属校

田中 博

(国際平和ミュージアム運営委員/一貫教育部 部付部長)

昨年度は戦後70年の節目にあたる年であり、附属校においても、様々な取り組みが行われました。そのような中で、初等中等教育においては、今の時代に即した平和教育が問われていることを実感しています。いわば、現代版「平和教育」です。生徒の生活環境は急速にグローバル化し、附属校の生徒、児童は多くの国際交流を経験しています。単に、海外へ行くというだけでなく、ネットを通して常に世界とつながり、生徒達の全ての言動が世界へ影響を与える時代に生きています。そこでの平和教育は、単に平和のための思想や未来の活動ではなく、日々の行動が全て世界の平和と繋がっている意識を持たせることが重要となります。その中で平和意識を養うことが現代版「平和教育」であり、それは、生徒、児童が「今、どう行動するか」の教育だと考えます。

立命館では、附属高校の内3校が国からスーパーグローバルハイスクール(SGH)、1校がユネスコスクールの指定を受けており、国際的な活躍を目指す生徒を育成する中で、平和について考えることを重要課題としています。中学校においても、すべての附属中学校が全員に海外研修を課し、小学校においても、国際行事を重視するとともに、高学年希望児童によるターム留学(2カ月)等を行うことで、生徒、児童の国際意識の涵養に努めています。

また、今年度は昨年度の戦後70年企画を引き継ぎながら、大学生との連携企画も継続して行ってまいりました。

このような様々な機会を通して、平和について、各々が何を大切に、何を行うべきなのかを深く考えることを日常の教育の中で行ってきています。10月9日(日)～12月16日(金)までの期間で、2週間ごとに以下の順序で各校の平和教育についての展示が行われました。各校の取り組みを多くの人々に見ていただき、広く広報するとともに、多くのご指導をいただけることを願っての取り組みでした。以下に今年度の立命館附属校平和教育実践展示における各校の内容を簡単に紹介します。

## 立命館中学校・高等学校

会 期：2016年10月9日(日)～10月21日(金)

テーマ：立命館中高の取り組み

中学校の全生徒が参加し制作した「立命館中学校聖火台～平和の灯火～」を中心に、平和をイメージした抽象絵画や、中2沖縄平和研修に向けた事前課題ポスターなどを展示しました。

## 立命館宇治中学校・高等学校

会 期：2016年10月23日(日)～11月3日(木・祝)

テーマ：現代的な平和課題の探究

「第15回東アジア青少年歴史体験キャンプ in 北海道」に16名の中高生が参加しました。そこでの成果や、「憲法70年企画」での取り組みを写真とポスターで報告しました。

## 立命館慶祥中学校・高等学校

会 期：2016年11月6日(日)～11月18日(金)

テーマ：慶祥の子どもたちが考えたこと

戦争体験を聞き、戦争と平和について考える平和学習が語り部の減少とともに難しくなっている中で、様々な角度で平和について考えることに挑戦した姿を紹介しました。

## 立命館小学校

会 期：2016年11月20日(日)～12月2日(金)

テーマ：5年生が考える「平和ポスター」

5年生の児童が、広島において平和学習を中心とした宿泊体験学習を行います。児童達は、多くのことを学び、平和について考えます。その思いを描いたポスターを展示しました。

## 立命館守山中学校・高等学校

会 期：2016年12月4日(日)～12月16日(金)

テーマ：立命館守山中高の国際理解教育・平和学習

創立10周年企画として実施したアウシュヴィッツへの研修旅行の様子や、中学美術で作成した平和ポスター、長崎平和研修旅行の事前学習として作成した平和新聞などを紹介しました。

これらの取り組みは多くの方々にご見学いただき、アンケートには以下のようなコメントをいただきました。「意欲的な作品に目を奪われました。」「中高生たちがこうしたテーマで自己を表現すること、クラスメートがどう感じているのかを知るとは、とてもよい取り組みだと思います。」「小学校の生徒さんのポスターに感動しました。」「どの新聞も空欄がほとんどなく、自分の言葉が詰め込まれていました。」「ぜひとも若い方々の努力が実を結びますように。」

小中高生時代に平和について深く考えることの重要性を実感しており、多くの子供達が将来、世界平和のために貢献してくれることを願って、今後ともより充実した平和教育に取り組んでいきたいと考えます。皆様からのご指導、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。



展示会場の様子

# 「絵葉書にみる日本と中国 :1894-1945」

会 期：2016 年 10 月 1 日（土）～12 月 11 日（日）

会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 1 階 中野記念ホール

参観者：16,867 名

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム

後 援：京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都市内博物館施設連絡協議会、KBS 京都、朝日新聞社、京都新聞、毎日新聞社、読売新聞社

現在、通信の他に記念品や観光土産とされる絵葉書は、かつて、災害などのニュース速報、観光宣伝、植民地や占領地のイメージ宣伝、戦時のプロパガンダとしても広く利用されました。本展では、世界的なコレクターであるドナルド・ラップナウ氏のコレクションの中から絵葉書を中心とした資料約 320 点を展示して日清戦争から第二次世界大戦終結までの日本と中国の歴史的出来事を紹介しました。

現在ほど情報通信技術が発達していなかった戦前に於いて、絵や写真に文章を添えて送ることの出来る絵葉書は重要な情報伝達媒体として活用され、また膨大な量が流通していました。この中には当時の日本・中国を描いたものも多く存在し、これら絵葉書を日中の関係を見る歴史資料として展示を行いました。絵葉書の中には戦地でたおれた兵士の死体が写されたものなど、現在では考えられないような題材もありますが、絵葉書は人の手に広く渡ることを前提として作成されるものであり、作成者、使用者が人に伝えようとするイメージが選ばれます。それらを見ることで当時の日中の関係性を考えることも可能です。例えば、満州帝国で日本人が発行した絵葉書には色鮮やかな物も多く、さながら満州帝国の建国理念であった「王道楽土」や「五族協和」を体現しようとしており、当時の人々が満州帝国に対して持っていたイメージや満州に対して内外に向けてどのようなイメージを持たせようとしていたのかを窺うことができます。

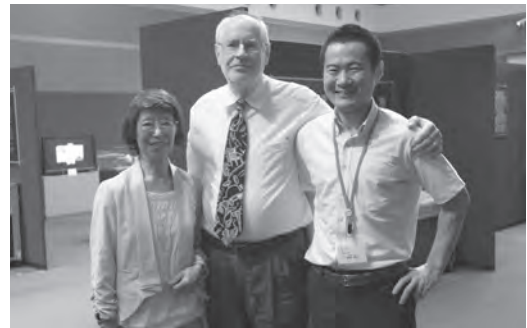
諸外国で発行された絵葉書にも当時の日中の関係を描いたものがあり、これらもあわせて、日中の関係が世界史の中でどのように描かれていたのか展示する試みを行いました。

また、会場ではミュージアムが所蔵する絵葉書資料約 90 点によるコーナーを設け、絵葉書が持つ資料としての特性についても展示をしました。絵葉書の年代特定方法や、絵葉書に書かれた文面なども紹介し、本展の理解を深める一助となりました。

これまであまり歴史資料としては扱われてこなかった絵葉書ですが、本展では、多様な側面を持つ当時の絵葉書の図像を中心として、1894 年から 1945 年の約 50 年にも及ぶ日中間の戦争の時代について改めて焦点を当てたことで、いまもなお多くの課題を残す日中関係について考える機会となりました。また本展関連イベントとして講演会、映画上映会も行い、多くの方にご参加いただくことができました。



展示会場の様子



ラップナウ夫妻（中央、左）と本展担当の篠田学芸員（右）

## 見学者の感想 アンケートより

絵葉書に織り込まれた政治性というものが非常によく窺うことが出来、興味深いものがあった。

(20代・大学院生)

絵はがきから戦争を見るという企画に新しさを感じました。今日のように情報がさまざまなところから入ってくる時代でないので、絵葉書が戦地の様子を知る上で重要だったことがわかった。一方で情報統制されていた時代の怖さを知りました。(30代・会社員)

絵葉書に興味があり、見に来ました。日本側から見たのではなく、世界から見た日本の印象はとても面白かったです。戦争というものが及ぼすさまざまな出来事、それに振り回される一般市民の生活のことを、ま

た改めて考えさせられました。世界に向ける視野についても、これからは広く持つべきだと思います。ありがとうございました。(70代以上・主婦)

教科書やインターネットでは見る事ができないものが見られて大変満足でした。今後も京都へ来た際は見学しに来たいです。(20代・大学生)

絵はがきを通して当時の様子を知ることができ、大変貴重な体験をさせていただきました。現在の絵はがきのイメージとは異なり、戦争の影響を色濃く受けた絵葉書を目の当たりにして、今日の平和な時代のありがたさを痛感しました。若い学生の皆さんにも、ぜひ見て頂きたいと思います。(30代・教職員)

### ■関連企画講演会

#### 「絵葉書で旅する大日本帝国一日中関係と日本人」

日 時：2016 年 10 月 29 日（土）13：30～15：00

会 場：国際平和ミュージアム 2 階 ミュージアム会議室

講 師：二松啓紀（立命館大学社会システム研究所客員研究員）

参加者：約 80 名

ドナルド・ラップナウ氏のコレクションを京都新聞紙上で紹介してきた二松啓紀氏が、当時の社会情勢や絵葉書が担っていた役割などについて講演されました。特別展に展示されている絵葉書や近年新たに見つかった絵葉書も含めて、約 100 点が会場内に投影されました。

当時の国際関係を反映した絵葉書も多数紹介され、巨大な中国という獲物を狙って争う巨人（ロシア）と小人（日本）といった構図を諷刺的に描いた絵葉書もありました。当日は満席となり、参加者からも多数の感想をいただき、絵葉書への関心の高さが窺えました。

#### —参加者の感想（アンケートより）—

- ・テレビはなく、新聞が主な広報手段だった時代に、絵ハガキのもつ広報力に驚きました。同時に、絵ハガキの与える



解説する二松啓紀氏

虚構が人々の中に入り込む過程がよく理解できました。（60代・教員）

- ・絵葉書を通して大衆に伝えるメッセージの一部を読み解くことができ、大変有意義な時間を過ごすことができました。歴史を継承していくにあたり、文字だけでなく画像も貴重な資料となるので、この資料の保存は重要となると思います。（20代・学生）

### ■関連企画

#### 映画『蟻の兵隊』上映会&監督トークイベント

日 時：2016 年 11 月 26 日（土）13：00～16：00

会 場：立命館大学衣笠キャンパス充光館地階 301 教室

講 師：池谷薫監督

上映作品：『蟻の兵隊』（監督：池谷薫、2005 年、101 分）

参加者：約 60 名

1945 年の敗戦後も中国の山西省には国民党軍に編入され、共産党軍との戦闘を余儀なくされた日本軍部隊がありました。この山西省日本兵残留問題を世界で初めて扱ったドキュメンタリーである本作は、元残留兵の奥村和一氏がこの事件の証人として自らの戦争体験を振り返るため中国を巡る姿を通して、残留問題、日中の戦争の歴史、戦争体験者の人生、戦後の日本の戦争との向き合い方についても問いかけるものでした。

上映会後の監督によるトークでは、映画だけではわからない映画撮影の経緯、奥村和一氏のこと、日本兵残留問題の複雑な背景、映画公開後の反響等が語られました。監督の解説や質疑応答により映画の理解が深められただけでなく、ドキュメンタリーを撮ることについても来場者と意見が交わされました。

参加者からの質問やアンケートでは、山西省日本兵残留問題を初めて知ったという声も多く、新たな日中の歴史を知るきっかけとなりました。



池谷薫監督

#### —参加者の感想（アンケートより）—

- ・終戦後に、このような事実があったことを初めて知りました。加害と被害ということについて、深く考えさせられました。特に、中国の方とのやりとりの中に「戦争という状況が、人を人でなくしてしまう」恐さについて考えさせられました。（50代・教員）
- ・改めて戦争の姿を、また戦争体験をかかえて戦後を生きてこられた元兵士の現実を知ることができました。「今、聞いておかないと、戦争がわからなくなる」「時間とのたたかいだ」という奥村さんの言葉が重く響きます。（60代・無職）

## 第23回日本平和博物館会議 開催報告

日本の平和博物館10館で構成される日本平和博物館会議は毎年、協議や情報交換のため、各館の館長や職員が集い定例会議を開催しています。本年は当館が開催館となり、2016年11月10日から11日の2日間にわたり、第23回日本平和博物館会議を開催しました。

初日は、記念講演会、会議、館内視察、意見交換会が行われました。

「世界の平和博物館の実情と課題」（講師：安齋育郎）と題した記念講演会では、日本や世界の平和博物館の事情に精通し、そのネットワークづくりに力を入れてきた当館名誉館長安齋育郎の視点から、現在、平和博物館が抱える課題とそうした中で新しいアプローチとしてのデジタルアーカイブ事業の実践紹介が行われました。参加者からは、市民参加型のデジタルアーカイブ作成事業をプラットフォーム化することができれば平和博物館全体の可能性が広がるとの声も寄せられました。続く会議では、立命館大学総長吉田美喜夫からの挨拶（代読）に続いて議事が行われ、本年は、平和博物館のコンソーシアム化充実のために加盟館の情報紹介コーナーを設けることの検討や、近年何かと話題となる「ダークツーリズム」についての議論を中心に議事が進められました。



会議の様子

戦争や災害など人類の負の遺産を刻んだ場所を訪れて死者を悼み、悲しみの記憶を共有する「ダークツーリズム」は、被爆地の訪問や戦跡めぐりの旅など、以前から広く実践されてきましたが、1990年代にイギリスで「ダークツーリズム」の概念が提起され分析・研究が進むとともに観光振興にも活用されるようになりました。日本では東日本大震災以降、特に注目が高まり、「ダークツーリズム」の名のもとで平和博物館を訪れる、個人の実践、旅行ツアー販売、研究が増えており、今回こうした内容での議論が行われることになりました。きっかけは何であれ、博物館を訪れて歴史の実相に対する理解を深め、平和学習の機会につながる来館者が増えることは平和博物館にとって重要なことですが、その一方で、例えば体験者の証言を聞く

機会や現在まで様々な営みがある記憶の場が「ダーク」という言葉で一括りに扱われることへの違和感や、それによって傷つく体験者の心情、悲惨さを商品化してしまうことなどへの懸念の声も平和博物館にはあることが論じられました。平和博物館は、今後もダークツーリズムの場として訪れる人々も迎え入れることには変わりはありませんが、「ダークツーリズム」という括りとの関わり方は慎重を要する側面があることが浮き彫りになりました。

会議の後は、平和博物館の中でも「大学立」の博物館という特徴を持つ当館の活動を支える学生スタッフによる活動紹介が行われました。



講義する湯浅万紀子先生

2日目は研修会が開催され、午前は北海道大学総合博物館の湯浅万紀子先生を講師に迎え「博物館体験の長期記憶を探る—来館者調査の意義と課題—」と題した報告をいただきました。科学館を舞台に博物館への来館体験が人々の長期的記憶の中にどのように位置付けられているのか調査研究を進めている先生の研究成果と、学術的成果を館の事業に落とす際の実践的な課題など、理論、実践の両面から平和博物館に役立つ講演を聞くことができました。



質疑応答の様子

午後は、「京都・大学ミュージアム連携」メンバー館である龍谷ミュージアムを訪れ、同館の岩井俊平先生に龍谷ミュージアムの成り立ちや課題、開催中の展示会の見どころなどについて解説いただいたのちに、展示を見学して研修を終えました。



## 「良心の囚人を救うために 私たちにできること～アジア地域、 発展の陰で苦しむ人々～」

日 時：2016 年 6 月 21 日（火） 16：20～17：50（90 分間）  
講 師：佐野陽子氏（公益社団法人 アムネスティ・インターナショナル日本 会員）  
場 所：国際平和ミュージアム 2F 会議室  
参加人数：11 名  
主 催：国際平和ミュージアム  
企 画：国際平和ミュージアム学生スタッフ 5 名  
下村はず希（法 2）、右田桃（文 3）、友野考佑（法 3）、  
山口美起（国関 3）、岸川あゆみ（文 3）

国際平和ミュージアムでは、毎年、2 階展示室で紹介している NGO12 団体の中から講師を招き、環境問題、難民問題など世界の諸問題について考えるワークショップを開催しています。企画・運営は学生が主体となって行います。本年度は「アムネスティ・インターナショナル日本」より佐野陽子氏を迎え、「良心の囚人」\*をテーマに人権問題について考えました。

導入では、ミャンマー（ビルマ）の政治情勢について、特に 1980 年代に始まった民主化の動きから 2016 年 3 月の新政権誕生までの流れと、軍事政権下でどのような人がどのような理由で「良心の囚人」となったかを紹介し、市民権を剥奪された少数民族民族の問題にも言及しました。また中国、韓国、タイ、マ



それぞれ書いたハガキを手に記念撮影

レーシア、インドなど他のアジアの国々における「良心の囚人」についても紹介しました。

ワークでは、そうした問題について私たちにできることをグループ毎に話し合い、発表しました。また、マレーシアの野党指導者が投獄されたことを批判するツイートをしたため収監され、長期刑を受ける可能性のある風刺画家ズナルを支援するハガキを書きました。参加した学生は「こんなことでも訴えるアクションになるのだと思った。アクションするのは微々たるものかもしれないが 1 であり、0 ではないという佐野さんの話が印象的だった」と話していました。

\*暴力を用いていないのに信念や信仰、人種、発言内容あるいは性的指向を理由として囚われている人々（アムネスティ・インターナショナル HP より）  
（本年度は前期のみ開催）

## Working for Kyoto Museum for World Peace

### 学生スタッフのしごと 02

文学研究科 青木拓哉

メディア資料室の学生スタッフの仕事は、利用者へのレファレンスサービスや国際平和ミュージアムの収蔵資料データベース「Peace Archives」のデータ登録・整理作業など多岐にわたっています。

それらの中で最も重要な作業のひとつが、寄贈頂いた資料の「資料カード」を作成する作業です。ミュージアムは、膨大な資料を所蔵していますが、「資料カード」作成作業は、各資料の状態や概要を把握し、資料を整理・登録する上で必要な作業です。また、「Peace Archives」の資料データは、我々学生スタッフが作成した「資料カード」を基に登録しています。

ここでは「資料カード」の作成について、簡単にその手順を説明し、メディア資料室の学生スタッフの仕事をご紹介します。

「資料カード」の作成に移る前に、寄贈資料には、まず、資料番号や資料名称などが決められ、「資料カード」作成待ちの棚に一時安置されます。基本的にここからが我々の作業の始まりとなります。

学生スタッフは「資料カード」作成待ちの棚にある資料を手にとると、第一にその資料の破損状態や寸法を計り、破損が著

しいものやカビや紙魚などの虫被害が無いかを確認し、もし、その被害が認められる場合は、学芸員の方に報告します。さらに、それらの資料状況をスケッチすることによって、資料の破損状態などを図示します。

次に資料の種別によって、「資料カード」に規定された項目や資料の概略・注意事項を備考欄に記述します。また、資料に記載される情報から、その資料が作成・使用された年代を比定することもあります。

これらの工程が終了すると、資料を撮影し、撮影された画像データは「資料カード」に記載されるのと同時に、「Peace Archives」にもアップロードされます。その後、別の学生スタッフによって再点検され、問題がなければ収蔵場所に保管されます。

以上、我々学生スタッフの「資料カード」作成という作業が、メディア資料室が提供する様々なサービスの基礎として、大きな役割を果たしていることが理解されたと思います。ミュージアムに来館された際には、是非「Peace Archives」などのメディア資料室が提供する様々なサービスもご利用いただければ幸いです。



## 周さんとの出会い

布川庸子

(立命館大学国際平和ミュージアム ボランティアガイド・平和友の会)

2016年3月6日。その日は中国からの来館だということでどんな出会いがあるか楽しみに出向きました。日本語でレポートを書きその入選者が来られるというので気が楽でした。

そういえばずっと以前の中国からの来館で心に残る出会いがあったことを思い出していました。

玄関から入ってこられた若い人たちはビデオの前に、どんどん座っていかれました。私はその後ろの方に立っていたのですが、少し年配の男性の

「あれ！布川さんではありませんか」

の声にびっくりしました。

「周です、周ですよ」

「まあ、周さん、憶えています」

「19年前になりますよ。なんと嬉しい再会だなあ」

今回いただいた周異夫さんの名刺には『吉林大学外国語大学院院長 中国日語教学研究会常務副会長』とありました。

長いガイド生活の中でも周さんとの出会いは大変心に残るものでした。

前回の時は通訳の要るお客様でした。これでは私は役に立たないと、積極的に近づくこともできず、見学者の後ろにひっそりと立っていたのです。

731細菌爆弾の前でした。と、目の前の背の高い男性が「日本の若者はこういうことを知っているのですか？」と聞かれた



地階展示室にて周異夫さん(右)、本人(中央) 1997年

のです。名札に目をやり、日本語であることに驚いているのを察しられ

「ああ、私日本語の教師をしているのです」と。

それを聞いてから、日本では、残念ながら学校教育では加害の事実はあまり教えていないのだということをお話しました。丁度その夏『家永裁判』が結審したところでした。加害の事実を書いては検定で、不合格になり、訂正、書き直し、それがあまりに続くので裁判に訴えられ32年間戦われやっとその結果「南京事件」「731部隊」「軍隊慰安婦」について著者が書いたからと言って検定で不合格にすることは、憲法違反であるという結審について話しました。裁判には多くの人の支援があったこと、またこのミュージアムも戦争や平和について学ぶとともに、平和創造のための施設として設立されたのだということをお話しました。再会し、私はあの時の方向で日本が進んでこなかったことを言うのは辛いことでした。

それを周さんは踏まえておられるのを感じ、でもそれに抗して頑張っている者もいることを解ってくださったのではないかと思つたのです。

## 入館者状況 (2016年10月～2017年1月)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	合計
開館日数	25	25	27	27	26	19	26	24	21	22	242
入館者数	1,786	4,286	5,686	2,781	2,118	1,580	7,914	6,950	3,989	1,046	38,136
累計(開館当初からの入館者数)											1,023,304
特別展	10/ 1～12/11 秋季特別展 「絵葉書にみる日本と中国：1894～1945」										16,867
ミニ企画展示	9/13～10/ 2 第103回 「ミュージアム・この1てん あたらしい憲法のはなし」										—
	10/ 9～12/16 第104回 第10回立命館附属校平和教育実践展示										—
	1/12～ 1/31 第105回 「ミュージアム・この1てん 『対敵宣伝須知』」										—
講演会ほか	10/10・11 第23回日本平和博物館会議										23
	10/10 「世界の平和博物館の実情と課題」講師：安齋育郎氏 (立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長)										35
	10/11 「博物館体験の長期記憶を探る—来館者調査の意義と課題—」講師：湯浅万紀子氏 (北海道大学総合博物館)										26
	<秋季特別展>										
	10/29 「絵葉書で旅する大日本帝国—日中関係と日本人—」講師：二松啓紀氏 (立命館大学社会システム研究所客員研究員)										80
	11/26 映画『蟻の兵隊』上映会&池谷監督トークイベント 池谷薫監督 /立命館大学衣笠キャンパス 充光館301教室										60

※会場記載のないものは、すべて国際平和ミュージアムにて開催

## 編集後記

いまだかつてないほど、世界の分断と排他的傾向が広がっているように見える。そんな時、“Let's Open Our World”というサイトに“The DNA Journey”という公開記録がアップされた。DNA分析によって、自分の父母、祖父母、曾祖父母、、、のルーツを辿ってみると、「私は100%〇〇人」「何となく〇〇人で好かない」と言っていた人々が、例外なく様々な人種が交じり合っていることが明らかになり、変わっていく。文字通り、自分自身の多様性がわかり、世界とつながっていることに気づく瞬間がそこにある。人種、国籍、宗教などによって、個人でなく集団として差別したり、偏見を持ったりすることはあってはならないことだが、それを臆面もなく明言するような人間が出現している今こそ、そのことに気づかせるこの実験には意味があるように思える(勿論これが悪用される可能性も充分考慮する必要がある)。

## 2017 年度春季特別展 DAYS JAPAN フォトジャーナリズム写真展

KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭 2017 Associated Program

### 開催趣旨

現在の日本におけるメディアのあり方を問う DAYS JAPAN は、戦争、貧困、環境問題など現在起こっている様々な問題を私たちに伝えています。DAYS JAPAN が開催する「DAYS 国際フォトジャーナリズム大賞」は、日本ではじめての本格的な国際レベルのフォトジャーナリズムの賞です。人間と自然の尊厳が奪われていることを告発する作品、人間と自然の尊厳を謳い上げる作品、心温まるストーリー、自然と動物のドキュメンタリー作品の部門から審査が行われています。本展は、これまでの受賞作品を展示し、世界が抱える問題とそこに生きる人々の姿を知り、いま一度、平和とは何かを考えるきっかけにさせていただきたく開催するものです。

### 企画概要

会 期：2017 年 4 月 15 日（土）～7 月 9 日（日）

開館時間：9：30～16：30（入館は 16：00 まで）

毎週金曜日は Friday Night Museum を実施、特別展のみ 19：00 まで延長  
（入館は 18：30 まで）

休 館 日：月曜日、4 月 30 日（日）、5 月 6 日（土）

会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 1 階・中野記念ホール

参 観 料：大人 400 円（350 円）、中・高生 300 円（250 円）、小学生 200 円（150 円）

※（ ）内は 20 名以上の団体料金

※ 16：30 まで常設展見学可 ※国際博物館の日（5/20・21）は無料公開

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム

協 力：DAYS JAPAN

後 援：京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会  
京都市内博物館施設連絡協議会、KBS 京都

朝日新聞社、京都新聞、毎日新聞社、読売新聞社（すべて予定）

### 関連企画 ※参加無料、申込不要

5 月 4 日（木）、映画『広河隆一 人間の戦場』上映会と広河隆一氏（フォトジャーナリスト）の講演会を充光館地下 301 教室で実施します。



第 11 回 DAYS 大賞審査委員特別賞「ガザ」  
オリヴァー・ヴァイクン（epa）

上：ガザ地区中部のカーン・ユニスにある国連学校の避難所へ向かうパレスチナ人一家。

下：避難民収容所として使われていた国連学校がイスラエルの戦車攻撃を受け、ケガをした少女。ペイト・ラヒアのカマル・アドワン病院の救急病棟に横たわる。



KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭 2017 について

京都市内の歴史的建造物、町家、寺院など 16 箇所を会場に開催する国際的な写真祭です。5 回目を迎えた今年は「LOVE」をテーマに国内外の作家が参加します。

## 世界報道写真展 2017 —WORLD PRESS PHOTO 17—

滋賀会場（立命館大学びわこ・くさつキャンパス）

会 期：9 月 21 日（木）～10 月 1 日（日）（会期中無休）

京都会場（立命館大学国際平和ミュージアム）

会 期：10 月 3 日（火）～10 月 27 日（金）

休館日：10 月 10 日（火）、10 月 16 日（月）

大分会場（立命館アジア太平洋大学）

会 期：10 月 30 日（月）～11 月 12 日（日）（会期中無休）

世界報道写真展は、オランダに本部を置く世界報道写真財団が毎年開催している世界報道写真コンテスト入賞作品で構成した写真展で、今年で 60 回目を迎えます。立命館大学では、1995 年より毎年開催しています。

この地球上で起きているあらゆる出来事を、最高の技術と取材力をもって撮影した写真は、人々に現実を強く訴える力を持っています。世界の現状を知り、いま一度、平和とは何かを考えるきっかけにさせていただきたく開催するものです。



人々の部 単写真 1 位 マグナス・ウェンマン  
イスラム国（IS）の恐怖と食糧難によりモスル（イラク）郊外の村から逃れてきた 5 歳のマハと家族。デバガ避難民キャンプ（イラク）の中継所でマットに横たわり「私には夢がないし、もう何も怖いものはない。」と言うマハの頭を母親がなでている。

詳細はホームページでお知らせいたします。

## INFORMATION

### ミニ企画展示室

第106回

#### 第22回京都ミュージアムロード参加企画 「京都と空襲」

会期：2017年2月4日（土）～3月26日（日）

主催：立命館大学国際平和ミュージアム

京都市内博物館連絡協議会、京都市教育委員会

内容：体験者の証言映像と爆弾の破片などの実物資料や写真から、空襲時の京都の様子や当時の防空体制を紹介します。



第107回

#### 「熟覧Ⅱーメディア資料室への誘いー」

会期：2017年4月1日（土）～5月28日（日）

主催：立命館大学国際平和ミュージアム

内容：国際平和メディア資料室の魅力を伝える企画の第2弾。学生スタッフに加えてハワイからの短期留学生による収蔵資料や図書の紹介などから、ミュージアムの持つ豊富な教育・研究資源の活用事例をご覧ください。



第108回

#### ミュージアム・この1てん 「もうたくさんだ」

会期：2017年6月1日（木）～6月30日（金）

主催：立命館大学国際平和ミュージアム

内容：沖縄戦やアメリカ軍基地問題などのテーマで出身地沖縄を描く儀間比呂志の版画作品を展示します。秋季特別展では、館蔵の作品68点の公開を予定しています。

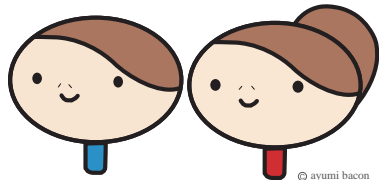


#### 夏休み親子企画

##### 「へいわ」ってなに?? 2017

2017年7月23日（日）

夏休みに親子で一緒に見て・感じて・考えて! 平和について学びましょう!! 国際平和ミュージアム名誉館長による平和のお話を聞いたり、大学生のお兄さん、お姉さんと一緒に平和について考えてみませんか? 夏休みの自由研究にも役立つ企画を予定しています。



© ayumi bacon

#### 教員下見見学会

2017年7月25日（火）～27日（木）

8月23日（水）～25日（金）

夏休み期間に小学校・中学校の教職員を対象とした下見見学会を開催します（参加無料）。安齋名誉館長による平和講義体験、ボランティアガイドつき見学体験、学習教材キットの紹介、個別相談会を行います。

\*7/1 申込受付開始



平和講義体験

立命館大学国際平和ミュージアムだより

第24巻第3号（通巻70号）2017年3月4日発行  
編集・発行 立命館大学国際平和ミュージアム  
〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1  
TEL: 075-465-8151 / FAX: 075-465-7899  
<http://www.ritsumeij.ac.jp/mng/er/wp-museum>

